

曹植の閨怨詩について―曹丕との関係を中心に―

趙 美子

はじめに

閨怨詩とは、主に夫や恋人と遠く離れた女性、或いは男に捨てられた女性の気持ちを詠う古典詩のジャンルである。前者は思婦詩ともいい、後者は棄婦詩ともいう。同じ夫婦の別れであつても、棄婦詩の別れは夫の裏切りによるものであり、思婦詩の別れは夫の仕官や従軍などやむを得ない事情によるものである。曹植の閨怨詩もこの二種類に分けられ、棄婦詩には「棄婦篇」^{〔1〕}「種葛篇」^{〔2〕}「浮萍篇」^{〔3〕}があり、思婦詩には「七哀詩」^{〔4〕}「雜詩六首（其三）」^{〔5〕}「閨情詩（其一）」^{〔6〕}がある。これらの詩は古くから注釈を付けられているほか、今でも多くの先行研究があり、議論が続いている。特に詩の趣旨については、単純な閨怨詩（虚構のものがたり）とするもの、また曹丕との関係を踏まえた詩人の心情の仮託とするもの、この二種の読み方がある。確かに曹植の多くの閨怨詩には曹丕との関連性が見られ、「仮託」という読み方に妥当性があると言える。しかし、「仮託」で解釈する場合は、詩の背景を曹丕に遠ざけられた境遇という方向で捉えがちになり、それでは歴史上の曹植と曹丕の関係を的確に反映しているとは言えない。本論は作品を史料と合わせて分析し、「仮託」という読み方の妥当性を確認しながら、曹植閨怨詩の背景と思われる曹丕との関係をめぐって再検討するものである。

一、曹植閨怨詩に対する従来の読み方

まずは二種の従来の読み方について検討しておきたい。両者は最初はそれぞれ『文選』の五臣注と李善注に見られる。『文選』巻二十三「七哀詩」の呂向注は、

子建爲漢末征役別離婦人哀歎、故賦此詩。

子建は漢末の戦争により夫と別れた婦人たちのために哀しみ嘆く。ゆえにこの詩を作った。

といい、この詩を単純な閨怨詩として解釈している。一方、巻二十九「雜詩六首」の李善注は、

此六篇並託喻、傷政急、朋友道絶、賢人爲人竊勢。別京已後在鄴城思郷而作。

この六篇はみな仮託であり、政治の厳しさや友の道の断絶、また賢人の位が奸臣に盗み取られることを悲しんでいる。都を離れて鄴城で故郷を懐かしんで作ったのである。

といい、六首の連作はすべて当時の政治的状況や作者自らの境遇の仮託であると指摘している。つまり、連作の其三も単純な閨怨詩ではないという可能性を示している。李善注のこの読み方は後世に大きな影響を与え、さらに発展していった。例えば、元代の劉履は同じ詩について、

此自言才華之美、而君不見用、如空閨織婦、服飾既盛、而良人從軍久而不歸者也。（『選詩補注』巻二）

この詩で自らいうには、才能が優れているのに、君主に用いられないことは、まるで空閨の織婦が美しく着飾っているのに、夫が従軍して久しく帰ってこないことのようにある、と。

と述べて、李善注を踏まえた上で詩の中の隠喩をさらに詳しく解釈している。もし李善注に従ってこの詩を鄴城に居る期間の作とすれば、ここの「君」が文帝曹丕を指すことが分かる。劉履は曹丕と曹植の関係を「君不見用」で総括し、曹植への同情と曹丕への非難を表している。また、五臣注に普通の閨怨詩として扱われた「七哀詩」についても、

子建與文帝同母骨肉、今乃浮沉異勢、不相親與、故特以孤妾自喻、而切切哀慮之也。（同上）

子建と文帝とは母を同じにする兄弟であるが、今は君臣の区別があり、相親しむことはできない。ゆえにわざわざ自らのことを寂しい妻に喩え、悲しんで文帝を懐かしく思う。

と述べて、明らかに詩における妻が夫と離れた内容を、曹植がいわゆる曹丕に遠ざけられた境遇と強く結びつけて解釈している。劉履の読み方も後世の研究者に継承されている。例えば、清代初年の何焯は、

蓋望文帝之悔悟、復爲兄弟如初也。（『義門讀書記』卷四十六）

恐らく文帝が悔悟して、兄弟が再び昔どおり仲良くなることを望むのであろう。

と述べており、少し遅れて清代後期の丁晏も、

此其望文帝悔悟乎。結尤悽惋。（『曹集銓評』卷五）

これは文帝の悔悟を望むのであろうか。結びはもつとも切なく婉曲を極める。

と類似した意見を述べている。「悔悟」という表現にはまた曹丕を非難する意味が含まれている。一方、棄婦詩に属する「浮萍篇」と「種葛篇」の主旨について古人の解釈はそれほど多くないが、ほぼ仮託の読み方をとっている。例えば明末清初の朱嘉徵は「浮萍篇」について、

諷君也。（中略）文帝編中、無帝王之度、使骨肉憂讒乃爾。（『樂府廣序』卷十）

君主を風刺する。（中略）文帝は心が狭く、帝王の度量を持つておらず、肉親に讒言をこれほどまでに恐れさせた。と述べている。また「種葛篇」について、

不見答於君、竊獨自傷、文帝時作也。（同上卷十四）

君主に答えられず、ひそかに独りで自らを悲しむ。文帝の時の作。

と述べている。

近代以降の先行研究は、多くは仮託の読み方に従うが、時に思婦詩は単純な閨怨詩として読まれる場合もある。例えば、郭沫若氏は「論曹植」（一九四三）の中で、同時期の作品として後漢末の戦乱を描いた王粲の「七哀詩」を曹植

の「七哀詩」と対照し、片方は深刻で写実的であり、片方は清新で浪漫的であると述べた上で、丁晏の意見に強く反対を唱えている。^②これはまさに五臣注の読み方への回帰ともとれる。李善注から仮託であるとされてきた「雜詩六首」其三についても、余冠英氏と伊藤正文氏は、恐らくただ古詩や樂府を擬して作っただけであろうという類似した意見を出している。^③一方、仮託の読み方では、依然として曹丕に遠ざけられた境遇を強調し、さらに思婦詩を直接に棄婦詩と見なすこともある。また詩の創作時期については、古人の結論はほはおおざっぱなものであるが、近代以降の研究ではより詳しく論じられ、様々な意見が出されている。

以上の先行研究から見れば、曹植の閨怨詩には兄曹丕に対する思いが映し出されているという読み、すなわち仮託という解釈では、曹植と曹丕の關係に対する「不仲」の印象が際立っている。確かに閨怨詩に描かれた夫婦のように、彼ら兄弟も曹丕の即位後に別れを迎えた。しかし、史書の記載やほかの文書と合わせてみれば、曹丕は曹植をわざと遠ざけたとは言えず、むしろ終始この弟に配慮を与えていた。^④棄婦詩に詠われた、愛する人に棄てられたような怨みは、背景と思われる特殊な事件による曹植の一時の不平を写してはいるものの、曹丕即位後の黄初年間（二二〇～二二六）にわたる彼らの關係を全般的に反映するものではない。一方、思婦詩に表現されたやむを得ない別れは、曹植と曹丕の關係の実態に近いものと思われる。これらの詩を単純な閨怨詩として読むのは、「不仲」の定見に拘らない方向に進むものだと思われるが、詩に託された曹植の思い、特に君主よりも兄への思いも無視すべきではないと考える。

以下では、曹植の閨怨詩を棄婦詩と思婦詩に分類し、それぞれの趣旨と創作背景について検討する。

二、「佳人 異心を懐く」——棄婦詩について——

夫に裏切られた妻の怨みや悲しみを詠う「種葛篇」と「浮萍篇」は、黄初年間における曹植と曹丕の關係の仮託とされることが多い。特に「種葛篇」は、諸篇の中で兄弟をイメージする要素が最も際立っている。先行研究に「種葛篇」の趣旨について異論を唱えるものがあまり見られないのは、これが原因かもしれない。また、主人公像が一般的

な聞怨詩の女性像と異なる点にも注目すべきである。以下はまず「種葛篇」の原文を掲げる。

種葛南山下 葛藟自成陰 葛を種う 南山の下、葛藟 自ずから陰を成す

與君初婚時 結髮恩義深 君と初めて婚せし時、髪を結びて恩義深し

歡愛在枕席 宿昔同衣衾 歡愛 枕席に在り、宿昔 衣衾を同じくす

竊慕棠棣篇 好樂和瑟琴 窃かに棠棣の篇を慕い、好樂 瑟琴和せり

行年將晚莫 佳人懷異心 行年 將に晚莫ならんとし、佳人 異心を懐く

恩紀曠不接 我情遂抑沈 恩紀 曠しく接せず、我が情 遂に抑沈す

出門當何顧 徘徊步北林 門を出でて當に何をか顧みるべき、徘徊して北林を歩む

下有交頸獸 仰見雙棲禽 下に交頸の獸有り、仰ぎて双棲の禽を見る

攀枝長歎息 淚下沾羅襟 枝を攀きて長く歎息し、涙下りて羅襟を沾す

良馬知我悲 延頸對我吟 良馬は我が悲しみを知り、頸を延べて我に對して吟ず

昔爲同池魚 今爲商與參 昔は池を同じくする魚爲り、今は商と參爲り

往古皆歡遇 我獨困於今 往古 皆 歡遇なるも、我独り今に困しむ

棄置委天命 悠悠安可任 棄置して天命に委ねん、悠悠として安んぞ任ずべけん

この詩の内容は二段に分けられる。前半は冒頭から「我情遂抑沈」までの十二句である。主人公は相手と結婚してから幸せな日々を送っていたのに、年を経ると相手の心が変わってしまったという経緯を語っている。後半は「出門當顧」から最後まででの十四句である。主人公は気持ちを晴らすために家を出て森の中を歩くが、つがいになる動物たちを見ると逆に悲しみに沈んでしまい、もう一度昔の幸せな日々を思い出し今の苦しい立場に絶望を感じる。結尾はすべてを運命に任せるしかないという消極的な気分で終わる。

清代後期の朱緒曾は、これは棄婦の題材を借りて自らの不平を託した詩であり、詩の中の「葛藟」「棠棣」はみな裏

に兄弟の意味を含んでいる、と述べている。確かに「葛藟」と「棠棣」は両方とも夫婦と兄弟を同時にイメージするが、「葛藟」は君臣の隠喩も含んでいる。『詩経』周南「樛木」に「南有樛木、葛藟累之（南に樛木有り、葛藟之に累る）」とあり、葛が樹木に絡むイメージで夫婦を喩えている。さらに王風には「葛藟」を篇名とする詩もあり、「終遠兄弟」の嘆きが詩全体を貫いている。その序には「葛藟、王族刺平王也。周室道衰、棄其九族焉（葛藟は、王族が周の平王を風刺する。周王朝の統治が衰え、その親族を棄てた）とある。また『左傳』文公七年にも「葛藟猶能庇其本根、故君子以爲比」とあり、宗室が君主を支えることを葛の葉や蔓がその根を覆うという特徴に喩えている。以上から見れば、葛という植物を選んで詩を詠い始めるのは、夫婦のイメージを表に出しながら、裏では宗室として君主を支える志向と君主が宗室を棄てる行為に対する風刺を意図しているからであろう。これもこの詩が決して単純な閨怨詩に留まらない証の一つである。

続いて「竊慕棠棣篇」二句は『詩経』小雅「常棣」の典故を用いている。「常棣」には「妻子好合、如鼓瑟琴。兄弟既翕、和樂且湛（妻子好合し、瑟琴を鼓するが如し。兄弟既に翕い、和樂して且つ湛しむ）」とある。ここではまた表で幸せな夫婦生活を描き、裏では曹丕との兄弟仲の良い昔を暗示している。しかも「常棣」には八章あり、前の六章は専ら兄弟の情愛をうたい、妻子に触れたのは最後の二章だけである。『毛伝』にも「常棣、燕兄弟也」とあり、この詩の趣旨を示している。従って曹植がここで「棠棣」の語を用いたのは、夫婦よりも兄弟をイメージする意図が強いからだと言える。

ほかには「昔爲同池魚、今爲商與參」二句も兄弟にかかわる表現である。蘇武「詩四首」其一（『文選』卷二十九）には「昔爲鴛與鴦、今爲參與辰。昔者常相近、邈若胡與秦。（昔は鴛と鴦為り、今は參と辰為り。昔者は常に相に近いきも、邈かなること胡と秦との若し）」とあり、常につがいになる鴛鴦と遠く離れる星辰の対比をもつて親しい兄弟が別れに臨むことを形容する。この二句で蘇武詩と類似した表現を用いていることから、ここでも夫婦の別れを借りて兄弟の別れを詠う意図が窺える。

「種葛篇」のもう一つの特別なところは主人公像である。閨怨詩の主人公はもちろん女性のはずだが、この詩の主人公像には女性らしさがそれほど目立たず、さらには男性のようにも見受けられる。早くにこの点に気付いたのは明の徐獻忠である。彼は「佳人懷異心」の表現を根拠として、この詩は友に裏切られたことを妻に捨てられた夫の話に仮託したと主張している。この読み方に賛成する意見はほとんどないが、一般的な閨怨詩と異なる主人公像を見出すところは参考にできる。誤解を招くのは「佳人」の呼称だけではなく、一人称の使い方や主人公の描写も問題になると思われる。例えば、後述する「閨情詩」にも「佳人在遠道、妾身單且營」とあるが、「妾身」という女性の一人称があるので「佳人」は明らかに夫を指す。ところが、「種葛篇」では主人公の自称が男女共通の「我」である。さらに詩の後半における主人公の活動に対する描写も、ほかの閨怨詩と比べれば女性らしい表現が欠けているように感じる。後述する閨怨詩に見える、閨の中で布を織る、高樓で悲しんで嘆く、或いは庭の中を歩くなどの描写が普遍的であり、女性主人公の行動範囲はほぼ家に限られている。ところが、「徘徊歩北林」や「良馬知我悲」などの表現から分かるように、「種葛篇」の主人公は家を出て馬を牽いて森の中を歩くのである。このような描写は閨怨詩の一般的な女性像とは違い、男性のイメージを喚起する。

しかし前述どおり、詩の中には君臣や兄弟の隱喩を加えて曹丕との関係を暗示する意図が明らかに見られる。もし主人公を夫にして相手を妻にすれば、曹植と曹丕の身分の差に相応しくないので隱喩は成立しなくなる。しかも違和感を感じさせるところは主に後半にあり、前半は性別不明の一人称「我」を用いるが、内容的には閨怨の枠組みをはずれない。それゆえ、ここではやはり主人公は夫に棄てられた妻ととらえるのがよいであろう。ならば、なぜ曹植はこの詩で、ほかの閨怨詩のようにより女性らしい主人公像を作り出していないのか。一つの可能性として、この「種葛篇」は曹植が自らの立場と感情を閨怨詩の形で表現する初めての試みであったかもしれない。だからこそ、ほかの閨怨詩より兄弟に関する要素を多く入れる一方で女性を描く意識が薄く、詩の前半では自らの感情を女性の視点を借りて閨怨の形で語っているが、後半では男性である自らの形象を表に漏らしているようである。ところで、「種葛篇」

の初出である『玉台新詠』は「良馬知我悲」の「馬」を「鳥」に作る。「鳥」であれば違和感が少なくなるが、「種葛篇」を解釈する諸書はほぼ「馬」に作る。それにもかかわらず、主人公像の違和感を意識せず無視しているようである。これも後世の読者が自然に詩の主人公と曹植自身を混同している証であろう。

同じ棄婦詩である「浮萍篇」は内容や表現が「種葛篇」と類似しているもので、一般的には創作背景の近い作品とされている。比較のため、以下は「浮萍篇」の最初の一部を掲げる。

浮萍寄清水 隨風東西流 浮萍 清水に寄り、風に随いて東西に流る

結髮辭嚴親 來爲君子仇 髮を結びて嚴親を辭し、来りて君子の仇と爲る

恪勤在朝夕 無端獲罪尤 恪勤 朝夕に在り、端無くも罪尤を獲たり

在昔蒙恩惠 和樂如瑟琴 昔に在りて恩惠を蒙り、和樂して瑟琴の如し

何意今摧頽 曠若商與參 何んぞ意わん 今 摧頽し、曠かなること商と參との若からんとは

(後略)

「浮萍」は強い根もなく水面に漂う植物であり、冒頭の二句は浮萍をもって自らの運命を掌握できないか弱い女性のイメージを表す。これだけでも君臣や兄弟をイメージする「葛藟」とは非常に対照的で、主人公が女性であることをより明確に示している。三四句目も「種葛篇」の「與君初婚時」のような比較的曖昧な表現とは違い、女性主人公が夫に嫁いだことを明示している。五六句目は主人公が謹んで夫に仕えていたが、無実の罪により棄てられたという経緯を表す。引用部分の最後の四句は、「種葛篇」の「竊慕棠棣篇、好樂和瑟琴」と「昔爲同池魚、今爲商與參」の表現に類似している。ただ、同じ『詩経』「常棣」と蘇武詩の句を踏まえたとは言え、「浮萍篇」の表現は「種葛篇」よりさらに古人の原文を活かしている。ここから二首の詩の創作順序が推測できる。古人の影響をより多く受けた「種葛篇」は先に、古人の影響を超えて作者自らの工夫がより多く見られる「浮萍篇」は後に作られたと考えられる。これも前述の推測と一致している。

また、二首の詩に見える主人公が棄てられた原因は少し違う。「種葛篇」は「佳人懷異心」、つまり単純に相手の心が変わったためであるが、「浮萍篇」は「無端獲罪尤」、つまり主人公が何かの罪を得たためである。これも詩の創作背景を考察する手掛かりとなる。曹植と曹丕の関係から考えれば、「種葛篇」の背景は比較的単純な別離の状況で、「浮萍篇」の背景は特定の事件のように思われる。曹丕即位後、曹植はほかの兄弟らとともに都を去り、諸侯として領地に赴いた。これが「種葛篇」の背景かと思われる。しかし、諸侯を領地に赴かせたのは当時の政治制度によるもので、決して曹丕がわざと曹植を遠ざけ、ひいては追放したとは言えない。従って、詩の中では「佳人懷異心」が「恩紀曠不接」の原因であるように述べているが、現実では逆に遠く離れているというすでに発生した状況から、相手の心が変わったのか、相手にわざと遠ざけられたのかというような不安が生じたのであろう。

「浮萍篇」の「無端獲罪尤」という表現は、黄初年間において曹植が実際に罪を得たことを連想させる。史書の記載と曹植自身の作品を合わせてみると、曹植は黄初二年に皇帝の使者を脅迫したことで監察官に奏上され、三年と四年にも地方官や監察官に何かの理由で告発された。このうち前の二回は朝廷に罪を問われることになった。これらの経歴が「浮萍篇」の背景になったと思われる。しかし、罪を問われたとは言え、一回めの処罰は爵位を一旦下げただけで済み、二回めは実質的に処罰されないまま領地に帰された。それ以降は奏上されても不問に付されたようである。その中で一回めの、使者を脅迫した事件の重大性は軽視されがちであるが、当時は使者に無礼をはたらけば皇帝を蔑視する行為と見なされ、死罪に至らなくても非常に重い処罰を受けるのが常であった^⑤。当時の群臣も曹植を庶民に落とし、ひいては殺すべきだと曹丕に進言したようであるが、曹丕はこれらの意見を一切受け入れず、曹植に比較的軽い処分を下した^⑥。以上から見ると、曹丕は曹植を迫害したという印象とは異なり、曹植を庇護している存在だと言える。従って、「浮萍篇」も「種葛篇」と同じように、確かに曹植が一時の不満を漏らしている作品ではあるが、客観的に見て曹丕が曹植を疎外や迫害した証とは言えないようである。

要するに、諸侯を領地に赴かせ、朝廷の使者や地方官が諸侯の行為を監察してその罪を告発するなどの曹植棄婦詩

の創作背景と思われる事項は、曹植個人に対する疎外や迫害ではなく、すべての王族に適用される政策によるものである。曹植の棄婦詩に描かれるのは相手の裏切りであったり、我知らぬ罪をとがめられての離別であったりするが、その背景にある兄弟関係の実態は、詩の内容や表現と必ずしも重ならないことを確認しておきたい。

三、「佳人 遠道に在り」― 思婦詩について―

曹植の思婦詩は「七哀詩」、「雜詩六首」其三と「閨情詩」がある。その中でもっとも名高いのは、『文選』卷二十三に収録された「七哀詩」だと言える。

明月照高樓 流光正徘徊 明月 高樓を照らし、流光 正に徘徊す

上有愁思婦 悲歎有餘哀 上に愁思の婦有り、悲歎して余哀有り

借問歎者誰 言是客子妻 借問す 歎く者は誰ぞ、言う 是れ客子の妻なりと

君行踰十年 孤妾常獨棲 君 行きて十年を踰え、孤妾 常に独り棲む

君若清路塵 妾若濁水泥 君は清路の塵の若く、妾は濁水の泥の若し

浮沈各異勢 會合何時諧 浮沈 各おの勢いを異にす、會合 何れの時にか諧わん

願爲西南風 長逝入君懷 願わくは爲西南の風と爲り、長逝して君の懷に入らん

君懷良不開 賤妾當何依 君の懷 良に開かずんば、賤妾 当に何にか依るべき

「七哀詩」の趣旨について、『文選』五臣注は単純な閨怨詩としているが、柳川順子氏によると、曹植より少し後の晋の時代では、「七哀詩」がすでに曹丕への思いを表す作品として認識されているという。さらに柳川氏は「七哀詩」を、晋人により「七哀詩」の原文に改編の手を加えられた「怨詩行」（『宋書』樂志三）と対比して、「清路塵」を「高山柏」に、「西南風」を「東北風」に改編する理由について論じている。¹⁰これを踏まえて、以下では「清路塵」の比喩と「西南」から「東北」への変化という二つの方面から「七哀詩」の趣旨と創作背景を検討する。

先行研究の多くは、「清路塵」と「濁水泥」を高貴で清らかなものと卑賤で汚れたものの対比で捉え、さらに曹丕と曹植の君臣関係の比喩として解釈している。ところが、『文選』呂延濟注は「清路塵」について、塵が風に漂うことで夫が従軍して止まりはできないことを喩えて言う^①と述べている。この解釈が「清路塵」のイメージにより近づいていると思われる。また、「清路塵」は曹植詩によく用いられる「轉蓬」というイメージにも非常に類似している。例えば「雜詩六首」其二には、「轉蓬離本根、飄颻隨長風（転蓬 本根を離れ、飄颻として長風に随う）」^②「類此遊客子、捐軀遠從戎（類たり 此の遊客の子の、軀を捐てて遠く、戎に從う）」とあり、「七哀詩」と同じように、従軍の遊子を風に漂うものに喩えている。実はどんなに清らかで高く飛揚しても、塵は極めて微小なものであるため、君主の喩えに用いるのは不敬である。ならば、曹植がここで「清路塵」をもつて曹丕を喩えるのは、崇高な君主よりも親しい兄への私的感情を表すためであると理解できるのではないか。「塵」と「泥」は本来なら同じものなのに、自らの意志で居場所を選ぶことができず、ともに風に吹かれて高く飛んだり低く沈んだりするしかないのである。曹植はこのイメージで、彼と曹丕も運命に翻弄されて、やむを得ず遠く離れた状況にあることを喩えていると考えられる。

「西南風」について、『文選』李周翰注は西南が坤の方位で妻の身分を象徴すると述べて、一つの解釈を提供している。劉履は「西南風」の表現からこの詩が魏の都の西南にある雍丘で作られたと判断しているが、実際のところ、雍丘を含めて曹植の領地はみな魏の都である洛陽より東のほうにある^③。また柳川氏は、晋人が「怨詩行」で「西南」を「東北」に変えたのは、洛陽の近くにある曹丕の首陽陵と、その東北にある曹植の東阿陵の位置を意識しているからだ^④と述べている。これらのように、詩の中の方位を現実の場所に結びつける考え方は啓発的である。ところで、曹植は雍丘の前に鄆城に封じられており、鄆城も洛陽の東北にある。もし「七哀詩」が鄆城で作られたものだとするれば、それを知っている晋人が改編する時に鄆城の方位を意識して「西南」を「東北」に変えた、という可能性もある。

さらに、「會合何時諧」という再会に希望を抱いていないような表現は、曹植のほかの作品にも見られる。黄初四年、曹植は洛陽に朝見し、その際に曹丕に献上した「上責躬應詔詩表」には「自分黄耆永無執圭之望（自ら黄耆まで永に

執圭の望み無きを分とす」(『文選』巻二十)とある。趙幼文氏によると、「執圭」は朝見の意味であるという¹⁵⁾。つまり、再び都に戻り曹丕に見えられるとは思っていなかったという気持ちを表している。しかも、曹植が鄴城に封じられた時期も黄初四年までである。従って、「七哀詩」は黄初四年の朝見の前までに作られたものだ¹⁶⁾と推測できる。

「七哀詩」同様に遊子の妻の立場で夫とのやむを得ない別れを詠う詩として、『文選』巻二十九に収録される「雜詩六首」其三がある。また同巻に曹丕の「雜詩二首」其二があるが、こちらも同じような別れの状況を遊子の立場で詠っている。さらに、二首の詩が同じ背景のもとに作られた可能性があると思われる。対照のため、以下に両方を掲げる。

曹丕「雜詩二首」其二

西北有浮雲 亭亭如車蓋

西北に浮雲有り、亭亭として車蓋の如し

惜哉時不遇 適與飄風會

惜しいかな 時遇わず、適たま飄風と會う

吹我東南行 行行至吳會

我を吹きて東南に行かしめ、行き行きて吳會に至る

吳會非我鄉 安得久留滯

吳會我が郷に非らず、安くんぞ能く久しく留滯せん

棄置勿復陳 客子常畏人

棄て置きて復た陳ぶる勿かれ、客子は常に人を畏る

曹植「雜詩六首」其三

西北有織婦 綺縞何繽紛

西北に織婦有り、綺縞 何ぞ繽紛たる

明晨秉機杼 日昃不成文

明晨より機杼を秉り、日昃くも文を成さず

太息終長夜 悲嘯入青雲

太息して長夜を終え、悲嘯 青雲に入る

妾身守空閨 良人行從軍

妾身 空閨を守り、良人 行きて從軍す

自期三年歸 今已歷九春

自ら期す 三年にして歸ると、今 已に九春を歴たり

飛鳥繞樹翔 嗷嗷鳴索群

飛鳥 樹を繞りて翔り、嗷嗷として鳴きて群れを索む

願爲南流景 馳光見我君

願わくは南流の景と為り、光を馳せて我が君に見えん

二首それぞれの創作背景については、『文選』張鈞注はすでに曹丕詩を呉征伐の時の作としている^①。一方、近代の黄節は曹植詩の「良人行從軍」が曹丕の呉征伐の喩えであると述べている。従って、二首の詩が同じ背景を有する可能性が高い。しかも、二首の詩は冒頭で同じく「古詩十九首」其五の「西北有高樓、上與浮雲齊」の「織婦」の「客子」の故郷と曹植詩の「織婦」の家は同じ「西北」にある。「客子」は「東南」に至って久しく留まり、「織婦」の夫が從軍している場所も「南」のようである。「客子」は旅に厭きて故郷に帰りたい気持ちを表し、「織婦」は旅先に向かつて夫に会いたいという願いを述べている。これらの箇所は二首の詩の関連性をより一層高めている。さらに言えば、二首の詩には唱和のような意味も含まれていると思われる。

また曹植詩自体から見れば、この詩における別れに対する描写や主人公の気持ちには、彼のほかの閨怨詩とは異なる特徴がある。例えば「七哀詩」の「君行踰十年」はただ別離の期間の長さを誇張する表現であり、現実には彼と曹丕が十年ほど離れているというわけではない。一方、「雜詩六首」其三の「自期三年歸、今已歷九春」という表現は、現実の別離の期間と結びつけることが可能である。李善注によると、「三年」と「九春」は同じ意味であり、すでに帰るべき時が過ぎたということを表す。しかし、もし「三年」と「九春」が同じ意味だとすれば、この表現には夫が間もなく帰るはずだというニュアンスも含まれているのではないかと思われる。また、同じ別れの情を詠うものの、「七哀詩」の「會合何時諧」のような再会に対する絶望感や、「君懷良不開」のような相手の心が果たして変わってはいないのかなどの疑いは一切なく、ただ相手への純粹な思いや会いたい気持ちをひたすら訴えている。ちなみに、詩の結尾に現れた「我君」は、早くに曹植の作品で曹丕への呼称として用いられている。建安十六年（二一一年）、二十歳の曹植は父曹操の遠征軍に参加し、曹丕は世継ぎとして鄴に留まった。その時、曹植は「離思賦^②」を作り、「願我君之自愛、爲皇朝而寶己。水重深而魚悅、林修茂而鳥喜（願わくは我が君は自らを愛し、皇朝の為に己を宝とさん。水重深して魚悦び、林修茂して鳥喜ぶ）」と曹丕への思いを綴っている。

さらに史書の記載と合わせて見れば、曹植がこの詩を作った時、現実にはすでに曹丕と再会できていた可能性がある。『魏志』の記載によると、黄初六年十二月、曹丕が呉征伐から洛陽に帰る途中、雍丘を訪れて曹植の宮殿に行幸し、また曹植の領地を五百戸加増した。^① 前の黄初四年にも洛陽で再会を叶えたので、四年から六年までの間は、まさに詩に詠われた「三年」の別れと一致している。つまり、詩全体の背景は曹丕の呉征伐に設定されているが、「三年」というのは主に曹植が曹丕と別れていた期間を指し、呉征伐の期間に完全に一致するとは限らない。

以上の分析が成立するなら、曹植のこの詩は、黄初六年に雍丘で再会した時、曹丕の詩を読んで長く別れていた間の再会を切望する気持ちを詠った作品だと考えられる。さらに言えば、曹丕の詩もこの時に作られ、曹植がその場で和した可能性もある。もしそうであれば、これが曹丕即位以来、二人の間の最初で最後の唱和であったかもしれない。

最後は「閨情詩」^② 其一を見てみよう。

攬衣出中閨	逍遙步兩楹	衣を攬りて中閨を出で、	逍遙して兩楹に歩む
閒房何寂寞	綠草被階庭	閒房	何んぞ寂寞たる、
空室自生風	百鳥翔南征	空室	自から風を生じ、
春思安可忘	憂戚與君并	春思	安んぞ忘るべけんや、
佳人在遠道	妾身單且擘	佳人	遠道に在り、
歡會難再遇	芝蘭不重榮	歡會	再び遇い難く、
人皆棄舊愛	君豈若平生	人皆皆	旧愛を棄て、
寄松爲女蘿	依水如浮萍	松に寄りて女蘿と為り、	水に依りて浮萍の如し
束身奉衿帶	朝夕不墮傾	身を束ねて衿帶を奉じ、	朝夕 墮傾せず
倘終顧盼恩	永副我中情	倘しくは顧盼の恩を終えたまわば、	永く我が中情に副え

「閨情詩」は同じ思婦詩に属する前述の二首ほど注目されてはいないが、詩の趣旨について、清初の寶香山人は「皇

帝の臨幸を望む気持ちが溢れている」と述べており、朱緒曾は「佳人」が曹丕を指し、「妾身」が曹植自らの喩えである²¹と述べている。また余冠英氏は、この詩は黄初六年、曹丕が雍丘に来て曹植と再会した後には作られたものである²²と述べており、詩の内容と「黄初六年令」との関わりを指摘している²³。これらの意見を踏まえて、さらに詩の中の「綠草被階庭」や「春思安可忘」などの春の描写と合わせて考えれば、この詩は黄初七年春の作であると推定できる。

詩に見える幾つかの特徴は以上の結論の傍証となる。まずは別れに対する強い感情が溢れている。前述の諸篇と違い、「閨情詩」では主人公が平穩な春の日に淡々と別れの愁いを語っており、暇で寂しい気持ちを漏らしている。直接に別れを表現するのは「佳人在遠道、妾身單且擘」二句だけで、しかもただ別れていることを述べており、「君行踰十年」や「今已歷九春」のような別れた時間の長さを強調する表現はない。「人皆棄舊愛、君豈若平生」二句から見れば相手への不安が生じているが、結尾に「倘終顧盼恩、永副我中情」とあるように、不安の中にはまた相手への揺るぎない愛情と期待が感じられる。これらの特徴は、すべて現実に曹植が曹丕と再会して、相手の気持ちを確認したばかりという状況に相応しいと思われる。

曹植はこの詩を作った時に、きつと次の再会を期待していたに違いない。ところが、黄初六年の別れは、実は彼と曹丕の今生の別れであった。それからわずか半年後、天子崩御の凶報が雍丘に伝えられた。「歡會難再遇、芝蘭不重榮」という人生の無常を嘆いている「閨情詩」は、図らずも曹植が曹丕に向けて詠った最後の詩となった。

おわりに

本論では曹植閨怨詩の趣旨と創作背景を分析した上で、以下の結論を出した。

- ・「種葛篇」は黄初元年から二年の間に、都を去り領地に赴くため曹丕と別れたことを背景とする。
 - ・「浮萍篇」は黄初二年から三年の間に、朝廷の監察官や地方官に告発され罪を得たことを背景とする。
- 以上の二首では自らの不満や悲しみを訴えている。

・「七哀詩」では黄初三年から四年の間に、曹丕に会いたいの再会の見込みがない中で切ない思いを詠う。
・「雜詩六首」其三では黄初六年十二月、雍丘で再会の時、曹丕の詩を踏まえてそれまでの別離の情を詠う。
・「閨情詩其一」では黄初七年春、再会を果たした後にもう一度生じた別れの情、また兄の愛情が変わらないこと及び次の再会への期待を詠う。

これらの詩には、確かに夫婦の別れを借りて兄弟の別れを表現する傾向、即ち「仮託」が見られる。しかし、王朝の制度や地理的距離のために離れていても、曹植が詩に託した曹丕への思い、また曹丕の行動に見える曹植への配慮はずっと続いていたのである。それゆえ、棄婦詩に詠われた相手の裏切りによる別れより、思婦詩に詠われたやむを得ない別れこそが黄初年間における曹植と曹丕の関係の実態に近いと言える。

注

(1) 「棄婦篇」はほぼ普通の閨怨詩として読まれるので、本論の論考対象として扱わない。『玉台新詠』卷二には「劉勰妻王氏雜詩二首」其一として収録され、その序には「王宋者、平虜將軍劉勰妻也。入門二十餘年、後勰悅山陽司馬氏女、以宋無子出之」とあり、この詩の背景を示している。ただ、『玉台新詠』では王氏自らの作とされる。のちの『太平御覽』卷九百七十では「棄妻詩」と題し、『古詩紀』卷二十三では「棄婦篇」と題して曹植の作とされる。

(2) 「論曹植」、郭沫若全集 歴史篇 第四卷、人民出版社、一九八二年。

(3) 余冠英『三曹詩選』（人民文学出版社、一九五六年第一版、一九七九年第二版）七七頁、また伊藤正文『中国詩人選集 曹植』（岩波書店、一九五八年）五八頁参照。

(4) 曹丕・曹植の関係性が従来考えられてきたような険悪なものではなかったという見解は、先行研究ですでに論じられている。例えば、津田資久氏は「曹魏至親諸王攷——『魏志』陳思王植伝の再検討を中心として——」（『史朋』三八、二〇〇五年）の中で、「文帝は、その魏王継承以来一貫して同母弟・曹植に特別な配慮を与え続けており、少なくとも

もその限りにおいて『慈兄』とさえ評し得るのである」と述べている。また劉坤氏・李劍鋒氏は「從曹丕對曹植的優待再審其兄弟關係」(『甘肅社会科学』、二〇一四、四)の中で、「建安時期曹丕与曹植兄弟相处融洽、關係親昵。黃初以后、曹丕待曹植較為寬容、封賞優厚、雖有小波瀾而無大問題」と述べている。

(5) 原文は「此亦不得於文帝、借棄婦而寄慨之辭。篇中葛藟棠棣、皆隱寓兄弟意」(『曹集考異』卷六)。

(6) 原文は「此因見棄於所交、而托爲夫婦之好不終者、以申其意也。行年將晚暮、佳人懷異心、可見夫爲妻之所棄、若漢朱買臣是也」(『樂府原』卷十四)。ところが、『樂府原』の中で本来なら曹植のほかの樂府と連続で収録されるはずの「種葛篇」は、陳の張正見「應龍篇」の後ろについており、作者名も欠けている。それゆえ、徐獻忠が「種葛篇」の作者を間違えて異なる意見を出したという可能性もある。清の朱乾は、「此托夫婦之好不終以比君臣、佳人謂夫。徐伯臣謂夫爲妻之所棄若漢朱買臣者、非也」(『樂府正義』卷十二)と述べて、徐獻忠の意見に反駁している。

(7) 『魏志』陳思王伝には、「黃初二年、監國謁者灌均希指奏植醉酒悖慢、劫脅使者。有司請治罪、帝以太后故、貶爵安鄉侯。其年改封鄧城侯」とある。また「黃初六年令」には、「吾昔以信人之心、無忌於左右、深爲東郡太守王機、防輔吏倉輔等任所誣白、獲罪聖朝。(中略) 頼蒙帝主天地之仁、違百司之典議、舍三千之首戾、反我舊居、襲我初服(中略) 出入二載(中略) 及到雍、又爲監官所舉、亦以紛若、於今復三年矣」とある。

(8) 劉坤・李劍鋒前掲論文では、『魏志』卷二十三の注に載せられた「沐並收劉肇」事件(縣令である沐並が監察官である劉肇を捕らえようとした結果、死罪の代わりに髡刑を受けた)と対照して見れば、曹植が使者に無礼を働いたのは決してただでは済まぬ罪であると述べている。

(9) 『文選』卷二十「賁躬詩」李善注には「植集曰、博士等議、可削爵土、免爲庶人」とある。また、『魏志』曹植伝注には、「植、朕之同母弟。朕於天下無所不容、而況植乎、骨肉之親、舍而不誅。其改封植」という曹丕の詔書が見える。

(10) 柳川順子「晋樂所奏怨詩行考―曹植に捧げられた鎮魂歌―」(『狩野直禎先生追悼三國志論集』、汲古書院、二〇一九年) 参照。

- (11) 原文は「言塵隨風之飄揚、此夫從征不息、泥在濁水之下以自比」。
- (12) 原文は「西南坤地、坤妻道、故願爲此風飛入夫懷」。
- (13) 原文は「此篇亦知在雍丘所作、故有願爲西南風之語。按雍丘即今汴梁之陳留縣、當魏都西南云」(『選詩補注』卷二)。
- (14) 譚其驥主編『中国歴史地図集』(第二版、中国地圖出版社、一九八二年)第三冊(三國西晋時期) 参照。
- (15) 趙幼文『曹植集校注』(中華書局、二〇一六年再版。初版は人民文学出版社、一九八四年)四〇二頁には、「執圭、古諸侯朝見天子、必執圭以爲贊、故執圭因爲朝見之代詞」とある。
- (16) 陳思王伝には「四年、徙封雍丘王。其年朝京都」とある。また、朱緒曾『曹集考異』卷五には、「今觀責躬詩、但云王爵是加、而未及徙封。蓋以鄆城王應詔、至秋歸鄆城後、始有徙封之事也」という考証があり、曹植が雍丘に転封されたのは朝見の後のことなのである。
- (17) 原文は「雲隨風去、至於吳會、謂伐吳也」。
- (18) 黄節『曹子建詩注』(中華書局、二〇〇八年)、二五頁。また、自序によると、原稿は一九二八年に完成されたものである。
- (19) 原文は「一歳三春、故以三年爲九春、言已過期也」。
- (20) 序には「建安十六年、大軍西討馬超、太子留監國、植時從焉。意有憶戀、遂作離思賦云」とある。
- (21) 陳思王伝には「六年、帝東征、還過雍丘、幸植宮、增戸五百」とある。また文帝紀には「六年」冬十月、行幸广陵故城(中略)十二月、行自譙過梁」とある。雍丘は譙と梁より西にあるので、曹丕が東南の广陵から西北の洛陽に帰る途中に雍丘に至ったのは十二月である。
- (22) 曹植別集では「閨情詩」と題するが、初出の『玉台新詠』では「雜詩」と題する。
- (23) 原文は「多望幸之思」(清・卓爾堪『合刻曹陶謝三家詩』曹集)。
- (24) 原文は「佳人指文帝、妾身植自喻也」(『曹集考異』卷五)。
- (25) 余冠英前掲書九九頁参照。